

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 4 月 20 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380893

研究課題名(和文) 二分法的思考が社会的適応に及ぼす影響の研究

研究課題名(英文) Effects of dichotomous thinking on social adaptation

研究代表者

小塩 真司 (Oshio, Atsushi)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：60343654

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：二分法的思考とはものごとを「白と黒」「善と悪」のように二項対立的に捉えようとする思考形態である。本研究では特に、二分法的思考と外在化問題に結びつきやすい心理指標との関連を通じて、二分法的思考の持つ意味や役割を明らかにすることを目的とする。第1に二分法的思考は誇大型の特権意識と強く結びついていた。第2に、外在化問題に結びつきやすいパーソナリティ特性であるダーク・トライアドは、二分法的思考と関連していた。第3に、二分法的思考は年齢ともなって直線的に低下していた。第4に、二分法的思考と攻撃性との間には正の関連が認められるが、その関連の大きさは若い年齢集団ほど大きいという効果が認められた。

研究成果の概要(英文)：Dichotomous thinking is an individual's propensity to think in terms of binary opposition, such as "black or white," "good or bad," and "all or nothing." Previous studies have shown that the dichotomous thinking links to undesirable psychological traits. The purpose of this study was to reveal the function of the dichotomous thinking by exploring the relationships between the thinking style and externalizing problem behaviors. Main findings were as follows: (1) The dichotomous thinking has a significant relationship with a grandiose entitlement. (2) There are significant positive correlations between the dichotomous thinking and the Dark Triad personality traits. (3) The dichotomous thinking traits tend to decline with age. (4) There is a positive correlation between the dichotomous thinking and aggression, and the dichotomous thinking and the aggression were more strongly correlated in younger participants.

研究分野：パーソナリティ心理学

キーワード：二分法的思考 適応 発達 外在化問題 パーソナリティ

1. 研究開始当初の背景

複雑な物事を分類して整理することは古くから多くの学問的な営みで行われてきたものであり、心理学においても気質類型は古代ローマ時代にまでその源をたどることができる。学問において分類という作業が行われてきた背景には、世界を認識する際に分類することで理解しようとする人間の認知特性が深く関わっており(三中, 2009), そもそも人間は基本的に単純化を求める動機や欲求を抱く傾向にある(Srull & Wyer, 1986)。そのような整理のしかたの中でも最も極端なものは、ものごとを「白と黒」「善と悪」「勝者と敗者」のように中間を排除した二種類のいずれかとして二項対立でとらえる、二分法的思考(dichotomous thinking)である。

二分法的思考は人間にとって基本的な思考形態ではあるが、そのような思考を実際に行う程度や、二分法を好んだり許容したりする程度には、個人差が存在する。Oshio(2009)は、この二分法的思考の個人差を測定する二分法的思考尺度(Dichotomous Thinking Inventory; DTI)を開発した。現在、このDTIには日本語版の他に、英語版、ロシア語版、ベンガル語版が存在し、国外の研究者との連携のもとで国際比較研究への基礎が固められている。

これまでの研究において、二分法的思考といくつかの個人差変数との関連が検討されているが、望ましい指標よりも一般的にあまり望ましくない指標との関連が報告されている。たとえば、他者軽視や完全主義、曖昧さの非耐性(Oshio, 2009)、固定的知能観(Oshio, 2012)、パーソナリティ障害(Oshio, 2012)、摂食障害傾向(Oshio & Meshkova, 2012)などである。また実証的研究は殆ど無いものの、過去の理論的・臨床的な研究からは、二分法的思考が他者への攻撃やいじめ、自殺といったより大きな問題にも結びつきうることを示唆されている。その一方で、二分法的思考が人間にとって根源的な思考形態であることを考慮すると、二分法的思考を起点として適応面に結びつくプロセスと、不適応に結びつくプロセスの双方を考慮することができるだろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、二分法的思考の適応面・不適応面の解明を目指すものである。特に、二分法的思考と外在化問題に結びつきやすい心理指標との関連を通じて、二分法的思考の持つ意味や役割を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は基本的に、調査手法を用いて遂行された。そのうちいくつかについては、インターネットを介したweb調査によって行われた。各研究結果の調査参加者については、各研究の説明内に記載する。

4. 研究成果

(1) 特権意識との関連

特権意識(Entitlement)とは「自分が他者よりも多くを得るに値し、多くを得る権利を持っているという、安定して一貫した感覚」(Campbell, Bonacci, Shelton, Exline, & Bushman, 2004)や、「特別有利な取り計らい、または自分の期待に自動的に従うことを理由なく期待する」(DSM-IV-TR: American Psychiatric Association, 2000 高橋他訳 2003, p. 683)と定義される概念であり、その概念定義からは社会的に望ましいとは言い難いパーソナリティ特性の1つであると考えられる。例えば、特権意識が高い者は自分に対する何気ない一言に過度に反応して対人関係を悪化させたり、自分が為すべき仕事を蔑ろにしたりすることが指摘されている(Twenge & Campbell, 2009)。

特権意識には2種類の自己愛の下位側面として誇大型特権意識と過敏型特権意識の2種類があり、それらとは特徴が異なる3つ目の特権意識として心理的特権意識があると考えられる。特権意識全体を明らかにする上で、特権意識に含まれる複数の側面を理解することは重要であり、そのためには特徴が異なると考えられる各特権意識の共通点や相違点を理解することが必要であろう。また、それぞれの共通点や相違点を明らかにすることで、これまで別々に作成されてきた特権意識尺度が何を測定しているかが明らかになり、今後の特権意識の測定に関して重要な指針になると考えられる。

この検討の一部として、特権意識と二分法的思考との関連を検討する。調査対象者は、質問紙調査に参加した大学生174名(男性84名、女性90名;平均年齢19.9歳, $SD = 1.4$)、およびインターネット調査の回答者941名(男性507名、女性434名;平均年齢27.1, $SD = 7.1$)であった。

Table 1に、特権意識と他の変数との関連についての相関係数を、Table 2に偏相関係数によって検討した結果を示す。特権意識と二分法的思考との関連については、相関係数を見ると全体的に正の関連を示していることがわかる。その中でも相関係数を比較すると、誇大型特権意識がもっとも二分法的思考と関連を示していることがうかがえる。

また、Table 2の偏相関係数を見ると、比較的現実的な肯定感に基づいた特権意識である心理的特権意識は二分法的信念と低く有意な正の偏相関、自分の特権性を主張したり他者を搾取したりする誇大型特権意識は二分法的思考の全ての下位側面と有意な正の関連、他者を避けようとする過敏型自己愛の特徴に沿った特権意識である過敏型特権意識は特に損得思考との正の関連が特徴的であった。

二分法的思考は全体的に、誇大型の特権意識と強く結びつくことが示された。このことは、二分法的思考が外在化問題に結びつく可能性を示唆している。

Table 1 特権意識と他変数との相関係数

	心理的 特権意識	誇大型 特権意識	過敏型 特権意識
特権意識			
心理的特権意識	—		
誇大型特権意識	.62 *** [.58, .66]	—	
過敏型特権意識	.41 *** [.35, .46]	.49 *** [.44, .54]	—
他者軽視	.35 *** [.30, .41]	.48 *** [.43, .53]	.51 *** [.46, .55]
二分法的思考			
全体	.32 *** [.26, .38]	.43 *** [.38, .48]	.36 *** [.31, .42]
二分法の選好	.29 *** [.23, .35]	.36 *** [.30, .41]	.30 *** [.24, .36]
二分法的信念	.34 *** [.28, .39]	.39 *** [.33, .44]	.27 *** [.21, .33]
損得思考	.17 *** [.11, .23]	.34 *** [.28, .40]	.34 *** [.29, .40]
自尊感情	.44 *** [.31, .55]	.10 [-.05, .25]	.03 [-.12, .18]
Big Five			
神経症傾向	-.23 *** [-.29, .16]	-.19 *** [-.25, -.13]	.03 [-.04, .09]
外向性	.20 *** [.14, .26]	.09 ** [.02, .15]	-.09 ** [-.15, -.03]
開放性	.29 *** [.23, .34]	.21 *** [.15, .27]	.11 ** [.05, .17]
協調性	-.02 [-.08, .05]	-.17 *** [-.23, -.11]	-.09 ** [-.16, -.03]
勤勉性	.30 *** [.24, .36]	.21 *** [.15, .27]	.09 ** [.03, .15]

*** $p < .001$, ** $p < .01$ 注1) 自尊感情のみ $n = 174$, それ以外は $n = 941$

注2) []内は95%信頼区間

Table 2 特権意識と他変数との偏相関係数

	心理的 特権意識	誇大型 特権意識	過敏型 特権意識
他者軽視	.03 [-.04, .09]	.26 *** [.20, .32]	.35 *** [.29, .40]
二分法的思考			
全体	.04 [-.02, .11]	.25 *** [.19, .31]	.19 *** [.12, .25]
二分法の選好	.07 * [.00, .13]	.18 *** [.12, .24]	.15 *** [.08, .21]
二分法的信念	.12 *** [.06, .18]	.20 *** [.14, .26]	.08 * [.01, .14]
損得思考	-.09 ** [-.16, -.03]	.23 *** [.16, .29]	.23 *** [.17, .29]
自尊感情	.46 *** [.34, .57]	-.03 [-.18, .12]	-.16 * [-.30, -.01]
Big Five			
神経症傾向	-.16 *** [-.22, -.10]	-.12 *** [-.18, -.06]	.16 *** [.10, .23]
外向性	.21 *** [.15, .27]	.02 [-.05, .08]	-.18 *** [-.25, -.12]
開放性	.20 *** [.14, .26]	.05 [-.01, .12]	-.02 [-.09, .04]
協調性	.12 *** [.05, .18]	-.18 *** [-.24, -.12]	-.03 [-.09, .03]
勤勉性	.22 *** [.16, .28]	.04 [-.02, .11]	-.05 [-.11, .02]

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

注1) 統制変数は当該特権意識以外の2つの特権意識

注2) 自尊感情のみ $n = 174$, それ以外は $n = 941$

注3) []内は95%信頼区間

(2) 二分法的思考と Dark Triad との関連

二分法的思考と特権意識との正の関連は、より広く二分法的思考が外在化問題に結びつきやすいパーソナリティ特性に関連する可能性を示唆している。近年、このような外在化問題に結びつく可能性の高いパーソナリティ特性として注目を詰めているのは、ダーク・トライアド (Dark Triad; Paulhus & Williams, 2002) である。

ダーク・トライアドは、マキャベリアニズム、自己愛、サイコパシーの3つの特性の複合体として捉えられる、比較的問題を発生させやすいパーソナリティ特性である。これまでの研究では、ダーク・トライアドの共通要素として協調性の低さ (Jakobwitz & Egan, 2006) や、パーソナリティ全体を6次元で表現する HEXACO モデルのうちのH因子 (Jonason & McCain, 2012) などがとりあげられている。本研究では、このダーク・トライアドの共通要素としての二分法的思考に注目する。

調査対象者は720名の大学生(女性452名、男性216名)であった。調査参加者は、二分法的思考尺度と The Short Dark Triad (SD3; Jones & Paulhus, 2014) の日本語版 (下司・小塩, 2017) に回答した。

Table 3 SD3 と DTI の関連

	DTI			
	1.	2.	3.	4.
DTI				
1. Total	—			
2. Preference	.88 **	—		
3. Belief	.79 **	.55 **	—	
4. Profit-and-loss	.82 **	.67 **	.39 **	—
SD3				
5. Total	.32 **	.28 **	.29 **	.23 **
6. Machiavellianism	.30 **	.20 **	.17 **	.37 **
7. Psychopathy	.28 **	.22 **	.32 **	.14 **
8. Narcissism	.07 †	.13 **	.09 *	-.05

Note . † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$; DTI = Dichotomous Thinking Inventory; Preference = Preference for dichotomy; Belief = Dichotomous belief; Profit-and-loss = Profit-and-loss thinking; SD3 = Short Dark Triad.

Table 3 は、SD3 と二分法的思考との関連を示した表である。全体として二分法的思考はSD3 と正の関連を示しており、ダーク・トライアドの3側面はいずれも、二分法的思考と関連することが示された。

また、二分法的思考によってダーク・トライアドの各側面を説明できるかどうかを検討するために、重回帰分析を行った (Table 4)。なお各分析において、年齢と性別を統制要因とした。その結果、マキャベリアニズムに対しては特に損得思考が正の影響を示すこと、サイコパシーに対しては二分法的信念が特に正の影響を示すこと、そして自己愛に対しては二分法の選好が正の、損得思考が負の影響を示していた。これらの違いは、ダーク・トライアドの3側面の内容の相違を反映すると考えられる。

Table 4 二分法的思考でダーク・トライアドを説明する重回帰分析結果

	Machiavellianism			
	B	SE B	β	p
Intercept	3.48	0.02		.00
<i>Control variables</i>				
Gender	-0.04	0.04	-.03	.38
Age	-0.01	0.02	-.03	.45
<i>Dichotomous thinking</i>				
Preference for Dichotomy	-0.11	0.04	-.13	.01
Dichotomous Belief	0.04	0.03	.05	.21
Profit-and-Loss Thinking	0.34	0.04	.43	.00
R^2	.14			
	Psychopathy			
	B	SE B	β	p
Intercept	2.48	0.02		.00
<i>Control variables</i>				
Gender	-0.08	0.04	-.07	.05
Age	0.00	0.02	-.01	.89
<i>Dichotomous thinking</i>				
Preference for Dichotomy	0.06	0.04	.08	.15
Dichotomous Belief	0.19	0.03	.28	.00
Profit-and-Loss Thinking	-0.02	0.04	-.02	.67
R^2	.11			
	Narcissism			
	B	SE B	β	p
Intercept	2.36	0.02		.00
<i>Control variables</i>				
Gender	-0.07	0.05	-.05	.14
Age	0.01	0.02	.02	.56
<i>Dichotomous thinking</i>				
Preference for Dichotomy	0.24	0.05	.28	.00
Dichotomous Belief	0.02	0.03	.03	.48
Profit-and-Loss Thinking	-0.21	0.04	-.25	.00
R^2	.06			

(3) 二分法的思考の年齢差

二分法的思考は、年齢にともなって変化するのであるか。攻撃性のレビューによれば、年齢に応じて攻撃性が低下する (Davis & Oliver, 2013)。また4歳から21歳を対象にした大脳のMRI スキャンによる発達研究では、年齢に応じて脳の後方から前頭葉に向けた発達が見られる (Gogtay et al., 2004)。実行機能の生涯発達では、思春期から成人期にかけて実行機能が向上し、その後低下する傾向が見られる (Zelazo et al., 2004)。二分法的思考と攻撃性の関連からは、年齢に応じた低下が予測される。また、もしも二分法的思考が実行機能にかかわるのであれば、曲線的な変化も予想される。

以上のことから、本研究では年齢に伴う二分法的思考の変化を検討する。

調査参加者はインターネット経由で集められた2,315名(女性1,128名)であった。平均年齢は36.1歳(SD = 16.2)、年齢範囲は18歳から69歳であった。隔年範囲の人数は以下のとおりである: 18-19歳 - 474(女性208)名, 20代 - 628(女性314)名, 30代 - 304(女性152)名, 40代 - 304(女性152)名,

50代 - 303(女性152)名, 60代 - 302(女性151)名であった。調査参加者は、二分法的思考尺度に回答した。なおこの参加者は、(4)と同じである。

DTI 総得点および3つの下位尺度得点を項目平均値によって算出し、それぞれを従属変数とした階層的重回帰分析を行った。独立変数にはstep 1に性別(男性1, 女性0)、年齢(中心化後)、年齢(中心化後)の2乗を投入し、step 2に性別と年齢、性別と年齢の2乗の交互作用項を投入した。

階層的重回帰分析の結果、いずれもstep 1の R^2 は有意であったが、step 2の R^2 および ΔR^2 は有意ではなかったことから、性別による年齢変化の違いは認められなかった。また、いずれの得点においても有意な影響は年齢のみであり、性別や年齢の2乗項の影響は有意ではなかった(DTI 総得点に対する年齢: $B = -.006$, $\beta = -.139$, $p = .000$; 二分法の選好に対する年齢: $B = -.005$, $\beta = -.113$, $p = .002$; 二分法的信念に対する年齢: $B = -.007$, $\beta = -.123$, $p = .001$; 損得思考に対する年齢: $B = -.005$, $\beta = -.111$, $p = .002$)。なお、年齢段階別の各得点の平均値をFigure 1に示す。

以上の結果より、二分法的思考全体およびいずれの下位尺度についても、年齢にともなって得点が直線的に低下する傾向にあることが示された。

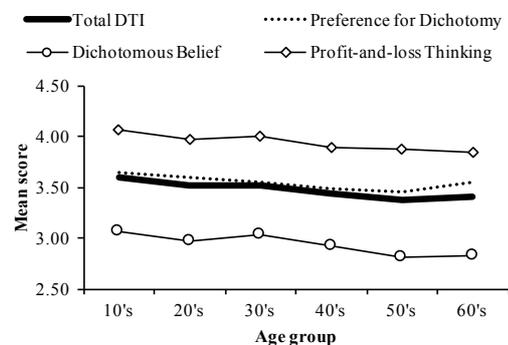


Figure 1 年齢集団ごとの二分法的思考の平均値

(4) 二分法的思考と攻撃性の関連に対する年齢の調整効果

攻撃性は特に青年期において社会的な問題となることがあり、深刻な問題をもたらす可能性のある心理要因である。攻撃性の背景要因として、認知的な歪みがよくとりあげられる。攻撃行動が生じるためには、状況を認知し解釈し、目標や行動を選択し、自分自身が行った行動を評価し、他者の評価や行動を解釈するといった、一連の過程が不可欠である。このような過程において、認知的な要因は大きな影響を及ぼすと考えられる。そこで、本研究では、認知的な偏りの要因として二分法的思考を取り上げる。

また、先に示したように、二分法的思考は

年齢に伴って低下する可能性も指摘される。また、攻撃性についても、年齢に伴って低下する傾向が指摘されている。これらのことは、年齢に応じて二分法的思考と攻撃性の関連についても変化していく可能性を示唆するものである。

調査参加者は(3)と同じ、2,315名であった。女性は1,128名、男性は1,187名であった。調査参加者は二分法的思考尺度と Bus-Perry 攻撃性尺度 (BAQ) に回答した。

まず、二分法的思考と攻撃性との関連を検討したところ、中程度の正の関連が認められた ($r = .48, p < .01$)。このことは、二分法的思考が攻撃性や攻撃行動に結びつく可能性を示唆している。

次に、年齢、性別、DTI、および交互作用項を独立変数とした階層的重回帰分析を行った。その結果、DTI と年齢の有意な交互作用効果が認められた。そしてこの結果は、高齢者よりも若年層のほうが、二分法的思考と攻撃性との関連が強くなることを示していた (Figure 2)。

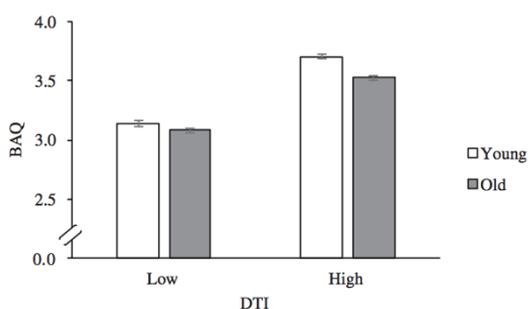


Figure 2 年齢・二分法的思考ごとの攻撃性得点

<文献>

American Psychiatric Association. (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. 4th ed. Text revision. Washington, DC; American Psychiatric Press. (アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 (訳) (2003). DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)

Campbell, W. K., Bonacci, A. M., Shelton, J., Exline, J. J., & Bushman, B. J. (2004). Psychological entitlement: Interpersonal consequences and validation of a self-report measure. *Journal of Personality Assessment*, **83**, 29-45.

Jakobwitz, S., & Egan, V. (2006). The dark triad and normal personality traits. *Personality and Individual Differences*, **40**, 331-339.

Jonason, P. K., & McCain, J. (2012). Using the HEXACO model to test the validity of the Dirty Dozen measure of the Dark Triad. *Personality and Individual*

Differences, **53**, 935-938.

三中信宏 (2009). 分類思考の世界-なぜヒトは万物を「種」に分けるのか 講談社

Oshio, A. (2009). Development and Validation of the Dichotomous Thinking Inventory. *Social Behavior and Personality: An International Journal*, **37**, 729-742.

Oshio, A. (2012). Dichotomous thinking leads to entity theories of human ability. *Psychology Research*, **2**, 369-375.

Oshio, A. (2012). An all-or-nothing thinking turns into darkness: Relations between dichotomous thinking and personality disorders. *Japanese Psychological Research*, **54**, 424-429.

Oshio, A. & Meshkova, T. (2012). Eating disorders, body image, and dichotomous thinking among Japanese and Russian college women. *Health*, **4**, 392-399.

下司忠大・小塩真司 (2017). 日本語版 Short Dark Triad (SD3-J) の作成 パーソナリティ研究, **26**, 12-22.

Srull, T. K. & Wyer, R. S., Jr. (1986). The role of chronic and temporary goals in social information processes. In R. M. Sorrentino & T. Higgins (Eds.) *Handbook of motivation and cognition: Foundations of social behavior*. New York: Guilford Press. Pp.503-549.

Paulhus, D. L., & Williams, K. M. (2002). The Dark Triad of personality: Narcissism, Machiavellianism, and psychopathy. *Journal of Research in Personality*, **36**, 556-563.

Twenge, J. M., & Campbell, W. K. (2009). *The narcissism epidemic: Living in the age of entitlement*. New York: Free Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

(1) 橋本泰央・小塩真司 (2016). 対人円環モデルに基づいた IPIP-IPC-J の作成 心理学研究, **87**, 395-404.

(2) 下司忠大・小塩真司 (2016). 特権意識の構造と特徴—3つの特権意識に注目して— パーソナリティ研究, **24**, 179-189.

(3) Oshio, A., Mieda, T., & Taku, K. (2016). Younger people, and stronger effects of all-or-nothing thoughts on aggression: Moderating effects of age on the relationships between dichotomous

thinking and aggression. *Cogent Psychology*, 3: 1244874.

〔学会発表〕（計 3 件）

(1) 小塩真司・三枝高大（2016）. 二分法的思考の年齢変化-18歳から69歳までを対象として- 日本社会心理学会第57回大会発表論文集, 401.

(2) Oshio, A., Shimotsukasa, T., & Mieda, T. (2017). Dichotomous thinking and dark triad personality traits: Are they related? Poster presented at *2017 SPSP (Society for Personality and Social Psychology) Convention*, San Antonio, TX, U. S. A.

(3) Mieda, T., & Oshio, A. (2016). Effects of Dichotomous Thinking and Information-Processing Style on Moral Judgment. Poster presented at the 31st International Congress of Psychology (ICP2016), Yokohama, Japan.

〔図書〕（計 1 件）

〔その他〕

ホームページ等

Dichotomous Thinking Inventory (DTI)

http://www.f.waseda.jp/oshio.at/index_e.html#DTI

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小塩真司 (OSHIO, Atsushi)

早稲田大学文学学術院・教授

研究者番号：60343654

(4) 研究協力者

橋本泰央 (HASHIMOTO, Yasuhiro)

下司忠大 (SHIMOTSUKASA, Tadahiro)

三枝高大 (MIEDA, Takahiro)